

Title	咬合治療は必要ない？ - 咬合位に求める機能美 -
Author(s)	佐藤, 亨
Journal	歯科学報, 119(5): 447-447
URL	http://hdl.handle.net/10130/5032
Right	
Description	

特別講演 5

咬合治療は必要ない？ －咬合位に求める機能美－

東京歯科大学クラウンブリッジ補綴学講座教授 佐藤 亨

顎口腔系における形態美・色彩美・機能美が調和して、はじめて人々の幸福に貢献する補綴歯科治療が達成される。審美的な満足感が得られなければ、治療によって咬合機能を回復できたとしても、患者さんは決して心身ともに健康を取り戻したという実感は得られない。補綴歯科治療では、咬合に関して悩むことも多い。例えば、現在の咬合をどこまで参考にすべきか、咬合の変更が必要か、患者さんに咬合の基準をどのように説明するか、などである。

歯科審美を考慮した基準面（線）としては、数ある顔面および歯列の水平基準面ではなく、正中線を基準に前歯および臼歯を配置し、審美的な調和を図るべきである。一方、生体に調和した咬合を考える際には、重力線を基準とし、これにあった体幹と頭位を確立しなければならない。

正しい咬合では、①安定した顎頭位、②咬頭が緊密に嵌合し、安定した歯・歯列の状態、③バランスのとれた筋の状態、となる。この正しい咬合位を得るために必要なのは、①正面像において、身体は重力線に調和した長方形の形態をとる、②この長方形の身体の上方中央に頭蓋が位置する、③それに伴って舌骨が正中に位置し、バランスのとれた筋の状態を保っている、ことである。この状態では、舌骨が正中線上に位置して真っ直ぐに開口し、その結果、理想的な咬合位を有し、かつ、理想的な咀嚼運動が行える。

このような咬合位・咀嚼運動を獲得するために必要なのは、まず、「患者への指導により、患者自身が姿勢の調整を行い、顔面正中・頭位と身体の中線と重力線にあわせる姿勢を取るようにする」ことである。この正しい姿勢を取ることができるようにするとともに、頭頸部および口腔内の筋・筋膜のマニピュレーションによる治療と口腔内スプリントによる治療を行い、バランスのとれた筋の状態を確保する。このようにしてバランスのとれた咬合状態（正しい咬合位・正しい咀嚼運動）を確保した上で、現状の咬合状態の確認（上下顎正中の一致性、顎頭安定位と咬合状態の関係、など）を行い、咬合状態と咬合治療の必要性について再評価する。なお、若年者の咬合関連症候群には、咬合が確立していないことも考えられるので、最初から歯を処置する咬合治療でなく、姿勢指導、生活習慣指導と筋・筋膜のマニピュレーションで対応している。

本講演では、これらの考えに基づいた、私の補綴臨床についてお話しする。

《プロフィール》



＜略歴＞

昭和54年3月 東京歯科大学卒業
 昭和61年3月 東京歯科大学大学院歯学研究科（歯科補綴学専攻）修了
 昭和61年10月 東京歯科大学歯科補綴学第二講座助手
 昭和63年4月 東京歯科大学歯科補綴学第二講座講師
 平成9年12月 ベルリン自由大学歯学部客員研究員
 平成13年5月 東京歯科大学クラウンブリッジ補綴学講座主任教授

＜学会活動＞

ニューヨーク大学
 平成19年4月～現在 国際プログラム指導教員
 日本歯科補綴学会
 令和元年6月～現在 監事
 日本歯科審美学会
 平成22年4月～平成24年3月 学会長
 令和元年6月～現在 監事
 日本歯科理工学会
 平成30年4月～現在 監事
 日本接着歯学会
 平成18年4月～現在 常任理事
 日本全身咬合学会
 平成12年4月～現在 常任理事